「共生的健康観」に基づく保健の授業づくりに関する研究

金田真樹

A study of health class-planning based on coexistence with a view of health

Masaki KANADA

Ⅰ　研究の目的

保健科とは何を教える教科なのかということを考え，「共生的健康観」の見識に着目した。そこで，「共生的健康観」に基づく授業ということで，授業案「性同一性障害」の作成を目指した。「性同一性障害」に対する深い理解を通した，性同一性障害者に対する「共感」が必要であると考え，「性同一性障害」の現代的課題を明らかにし，授業で何を伝えていくのかを提案した。そして「共生的健康観」に基づく「性同一性障害」の授業を作成し，授業を実践し，検討を加え，さらによりよい授業を作っていくことを目指した。

1，保健科教育の現代的課題「共生的健康観」を明らかにする。
2，「性同一性障害」の現代的課題を明らかにし，何を伝えるべきなのかを提案する。
3，「共生的健康観」に基づく「性同一性障害」の授業を作成，授業実践し，その検討を通して，よりよいものに改善していく。

Ⅱ　研究の方法

本研究では，「共生的健康観」についての考え方を保健教材研究会のメンバーの先行研究をもとに整理し，「性同一性障害」の現代的課題を文献より整理した。池田忍氏の「トランスジェンダー」を検討し，新たな「性同一性障害」に関する授業を提案し，授業実践・検討を行い，修正プランを作成した。

授業実施日
　1時間目　12月10日
　2時間目　12月17日
授業実践校　クラス　授業者
　名古屋市内M高校　3年2組　全32名　K先生

Ⅲ　「共生的健康観」について

現在の保健科教育は，「行動主義」「健康の自己責任」が強調されている。[1] 健康に過ごしていくために，一人ひとりが健康な行動を心掛け，自らの健康に責任をもてというものである。しかし，個人の健康は，少なからず他者や社会に依存しているものである。そのようなものまでも，自己責任ということはできない。健康に暮らしていくためには，個人の健康を考えるだけではなく，他者の健康，社会の健康までをも考えていかなければならない。そこで，「共生的健康観」が必要とされるのである。本研究では，「共生的健康観」を次のように定義づけた。

自らの健康だけではなく，他者あるいは社会全体の健康問題について考え，誰もが健康に暮らしていける社会をつくるために何が必要なのかを考

えることができる見識。

「共生的健康観」に基づく保健の授業ということで，近藤真庸氏の「エイズとともに生きる」が挙げられる。この授業は「身体認識」から「健康認識」へという構成となっている。[2] つまり，自然科学的な知識を通した病者への共感を通して，「共生」することの大切さを考えることを目指している。このことを念頭におき，「共生的健康観」に基づく授業をつくる必要があると考えた。

Ⅳ　性同一性障害・半陰陽の現代的課題

性同一性障害の現代的課題として，性同一性障害者が今望むことについて検討した。一番望んでいることは，差別や偏見なく，一人の人間としてみんなと共に生きていきたいということである。性同一性障害者の性自認を大切にし，一人の人間として共に歩んでいくことが求められる。

半陰陽の現代的課題として，性別決定の問題がある。現在，半陰陽の胎児の戸籍は，「調査中」とされる場合もあるが，ほとんどの場合医師によって決定されてしまっている。また，自らが半陰陽かどうかも分からずに生活をしているという例もある。そこで，男性・女性のあり方について考えていくことが求められる。

Ⅴ　授業プラン「性同一性障害」

1）池田忍実践「トランスジェンダー」[3] の検討

保健科で初めて性同一性障害に関する授業を提案したのが，池田忍氏の「トラスジェンダー」である。この授業の検討をもとに，授業案作成を目指した。以下は検討結果である。

・身体の性別決定に関する発問が多い⇒性同一性障害者に対する「共感」がうまれにくい。
・発問とお話のつながりが不自然である。⇒授業に流れが感じられない。
・説明に難しい言葉を多く用いている。⇒性同一性障害を遠くの問題と感じてしまう。

2）授業プラン「性同一性障害」の作成にあたり

発問とお話のつながりの不自然さの解消を目指し，本研究では「狂言まわし」の手法を取り入れた。「狂言まわし」とは，お話と発問の間に２人の会話を入れ，その会話を軸に授業を展開するものである。２人の会話を通じて，子どもたちが問題に対して疑問を持ち，自ら考え，積極的に意見交換がされることを目指した。性の問題というのは，答えにくいものであるし，クラスの中に性同一性障害の子どもがいる可能性もある。そこで，直接的に子どもたちに質問するのではなく，２人の会話を使い，その中で出てくる疑問を通して間接的に質問することによって，答えにくい雰囲気をなくすことができると考えた。

性同一性障害者の気持ちについて考える発問や「法律の性」「社会の性」について考える発問を多く設定した。性同一性障害者が，生きていく上で今何を考えているのかということを考える発問を設定した。性同一性障害者の視点に立った「共感的理解」を得られることが出来ることを目指し，それが，「共生的健康観」につながると考えた。

半陰陽の問題では，世界陸上で金メダルを獲得したが半陰陽者ではないかと報道されてしまったセメンヤ選手の事例を扱うこととした。これからセメンヤ選手が陸上選手としてどうしていくべきかを考えることによって，性のあり方について考えることを目指した。

3）授業プラン「性同一性障害」授業構成

・１時間目

〈質問１〉この写真に写っている３人には，共通することが１つあります。それは何だと思いますか？

〈質問２〉性同一性障害はいつ頃なると思いますか？

〈問題１〉性同一性障害の人が，自分の性別に違和感を覚えるのはどんな場合だと思いますか？

〈質問３〉性同一性障害の人の性に対する違和感を減らす方法はあると思いますか？

〈問題２〉性自認と違う身体で生きていく上で大変なことや辛いことは何だと思いますか？３つあげてみましょう。

・２時間目

〈問題３〉性同一性障害の人が，同性の恋人と結婚するためにはどうすればよいでしょうか？

〈質問４〉男性・女性を決める要素は何があると考えますか？

〈問題４〉９つの性のかたちのうち，男性・女性は何で決められるべきだと考えますか？

〈問題５〉セメンヤ選手が今後も陸上選手として大会に出場するためにはどのような方法があるでしょうか？

〈問題６〉この授業で感じたこと，考えたことを書いてみよう!!

Ⅵ　修正プラン「性同一性障害」「半陰陽」

授業プラン「性同一性障害」を授業実践し，授業プリント，感想文，授業ビデオ，授業者への聞き取り調査より検討を行った。以下は検討結果である。

・授業者への聞き取り調査より

授業書が文字の羅列で授業しづらいと指摘をいただいた。そこで，授業の流れを示した演出ノートを作成した。また，二時間またぎの授業構成ではなく，性同一性障害１時間，半陰陽１時間の授業構成とすることとした。

・授業プリント，授業ビデオより

一時間目においては，性別決定の説明があいまいで不十分である。質問３において，具体性がなく，意外性がない。問題１と問題２の聞きたいことが重複している。二時間目においては，半陰陽の説明が不十分で難しい。質問４，質問５がわかりにくく答えにくい発問である，という問題点が挙げられた。

・感想文より

「性同一性障害の人の気持ちが少し分かった」「性同一性障害の人を受け入れることが出来ると思う」などの感想が多数あった。性同一性障害者への一定の共感が出来ていたといえる。しかし，「自分は性同一性障害じゃなくてよかった」「セメンヤ選手が女性として陸上大会に出場するなら，ハンデをつけるべき」などという意見もあった。「共感的理解」がまだまだ足りないという一面もみられた。かわいそうな障害者という一面だけではなく，たくましく生きる一人の人間としての性同一性障害者を伝えていく必要がある。そのことが，一人の人間として認め，共に生きていくにはどうしたらいいか考えることができるのではないかと考えた。これらの点を考慮し，修正プランを作成した。

Ⅶ　総論

１）「共生的健康観」の見識を身に付けるには

「共生的健康観」の見識を身に付けていくために，次の二点が必要であると考えた。

・様々な問題で苦しみながらも，一人の人間としてたくましく生きようとしている性同一性障害者のお話を伝える。

・系統的に「共生的健康観」に基づいた授業をおこなう。保健科の他の単元でも，「共生的健康観」の見識を身に付けられる授業案を考えていく必要がある。

２）保健の授業づくりに関する考察

これから保健科の授業をつくっていくにあたり，大事にしていくべきこととして以下の3点を提案した。

・子どもの興味があふれ出してくるような授業構成

授業構成に関して，本研究では「狂言まわし」の手法を取り入れた。これにより，発問とお話につながりのある授業をすることができると考えた。さらに，保健科の授業には近藤真庸氏の教授行為を意識した「シナリオ形式」という方法もある。授業の流れを意識し，子どもたちの興味があふれてくるような授業をつくる必要がある。

・具体的で考えやすく子どもの日常生活に結びついた発問

保健科の授業における発問においては，「具体性，検証可能性，意外性，予測可能性」が求められる。特に保健科は，子どもたちの生活に結びつく教科であるので，子どもたちが具体的にそのことについて考えられ，生活体験や既有の知識で考えることができる発問が求められる。

・興味を持ち，授業が終わってからも追求していきたいと思えるような素材

授業の中で扱う素材が大切なポイントとなる。子どもたちが授業に入り込み，授業が終わってからも追及していきたくなるような素材が必要である。

Ⅷ　今後の研究課題

・本研究で作成した授業プラン「性同一性障害」「半陰陽」のさらなる検討
・系統的な「共生的健康観」に基づく保健授業のため，さまざまな分野での授業づくり

引用参考文献

1）藤田和也：曲がり角に来た保健科教育.体育科教育　53巻4号：p58，2005年4月号
2）近藤真庸：保健授業づくり実践論，p227，大修館書店，1997年
3）池田忍：トランスジェンダー.保健教材研究会編.最新「授業書」方式による保健の授業，p58～p64，大修館書店，2005年

（指導教員　坂田　利広）